



TITLE:

中國官僚の商業高利貸的性格：清末における兩淮鹽商の二例を中心として

AUTHOR(S):

波多野, 善大

CITATION:

波多野, 善大. 中國官僚の商業高利貸的性格：清末における兩淮鹽商の二例を中心として. 東洋史研究 1951, 11(3): 233-251

ISSUE DATE:

1951-10-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138929>

RIGHT:

中國官僚の商業高利貸的性格

——清末における兩淮鹽商の二例を中心として——

波 多 野 善 大

れてきた、新しい官僚の型をしめすものといえないだろうか。^{*}

中國においては、官僚、地主、商人高利貸が三位一體である、とよくいわれている。官僚が地主層から出ること、また、官僚が地主化することは、地主そのものの性格のちがいを別にすれば、漢代らしい變らない事實であろう。しかし、商人高利貸から官僚が出た

^{*} もちろん、それ以前においては、官僚の商業高利貸的性格が見られなかつたのではないが、（それについては、鈴木俊氏「唐代官僚の蓄積に就いての一考察」（東亞八ノ八）、傅安華「唐代官僚地主的商人化」（食貨一ノ六）など参照）、貨幣經濟の發展とともに、いちじるしい傾向として現われてきたのではないかと思われる。

り、商人高利貸が地主化することは、たとえ古くからみられた現象であつたとしても、支配的な傾向としては、新しい、おそらく宋代、さらに降つて明代の中ごろよりのちの、貨幣經濟の發展と表裏する事實とみてよいのではなからうか。官僚の商人高利貸的性格も、かかる流通經濟の發展とともに、いちじるしく形成さ

しかし、官僚の商業高利貸的性格は、具體的にはつきりしないのである。これは、中國における特殊な企業組織である匿名組合によつて、事實上は官僚の出資にかかる商業高利貸の企業でありながら、表向きには經營擔當者の名義で運營され、出資者であり、利潤收得者である官僚は、背後にかくれて名をあらわさな

いからである。

ところが、このような匿名で営まれる官僚の商業高利貸的企業が、なんらかの機会に正體を暴露されることがある。陳夔龍の「夢蕉亭雜記」(卷上)にこんな記事がある。義和團事件のとき、北京のシヴィック・センター珠寶市が拳民にやかれ、ここに店をもつていた二十餘軒の馬蹄銀鑄造店であり金融業者である爐房が罹災して閉店した。そのために、この店と取引のあつた東四牌樓通りの四恒とよばれた著名な四つの兩替屋(錢鋪)も店をとざした。この四恒は信用が絶大で、北京の金融界の中心をなしていたので、これをどうして救済するかが問題となつた。このとき、順天府尹心得をつとめていた陳夔龍がその解決にあたつたのであるが、當時の軍機大臣の一人であつた剛毅が、陳夔龍にむかつて、どうか質屋(當舖)に迷惑のかからないようにしてくれ、としきりにたのむので變におもつていたところ、あとになつて、剛毅が質屋(當舖)を三軒ももつてることがわかつた、という。しかし、こんなことはもの數ではない。

もつとも有名なのは、かの乾隆帝の晩年のお氣にいらであつた和坤のはなしである。かれが乾隆帝のなくなつた直後にとらえられた際、嘉慶帝が、そのみことのりのなかでかぞえあげた罪二十の第十九には「通州、蘇州地方に質屋(當舖)、兩替屋(錢店)を有し、その資本は十餘萬兩を下らず、首席大臣でありながらもじもの小民と利を爭うた」ことがあげられている(實錄仁宗朝三十七卷、嘉慶四年正月甲戌の條)。蕭一山は、確實性については保證のかぎりではないという筆寫本にもとづく和坤の財産目錄をかがけている。そのなかには、質屋(當舖)七十五軒、資本銀二千萬兩、銀號四十二軒、資本銀四千萬兩、骨董屋(古玩鋪)十三軒、資本銀二十萬兩があがつている。「清代通史」中卷二四五頁)。これは、すこし大げさにすぎるとおもわれるが、いずれにしても、和坤がわいろによつてえたものの一部を商業高利貸的企業に投じていたことは、動かしえない事實であつたろう。いまここに紹介しようとするものは、「兩淮案牘鈔存」第二冊の中かちとつたものである。これは、二つの財産争いについ

ての訴訟文書によつて暴露された、清末官僚の商業高利貸的事實であつて、野史、軼聞のたぐいにくらべてたしかであり、しかも、その運営の機構が具體的にしられるという興味のあるものである。

二

喬松年（おくり名は勤恪）といえ、咸豐、同治のころの二流どころの大官である。全集も出版されており（喬勤恪公全集、光緒三年喬廷樞、喬聯寶の二人によつて出版されている）。清史稿四三一卷に傳があるほか、續碑傳集卷二七には方濬頤の作つた墓志銘がおよさめられている。それによると、かれは山西省徐溝縣の出身で、祖父の人傑は湖北按察使、養父の邦憲は刑科給事中、實父の邦哲は直隸遵化州の知州というようなくあいに、代代官僚をだしている家にうまれた。道光十五年十九歳で進士に及第し、工部主事をふりだしにして、咸豐三年松江府の知府、ついで蘇州府の知府となつて蘇松太道（道は知府の上に位する地方官）をかね、ついで常鎮通海道、署兩淮鹽運使（兩淮地方の

鹽に關する事務を掌る役所の長官心得）をへて、咸豐九年兩淮鹽運使兼江北糧臺（太平天國のときの江北防衛軍「江北大營」の軍需長官）となり、同治二年江寧布政使（布政使は一省の民政の長官、ただし、江蘇省には二人いて、江寧すなわち南京と蘇州に駐在した）にうつつた。このあいだ、太平天國爭亂の最中にあたり、清朝軍に對する軍需の調達に功績が大きかつた。ついで、安徽巡撫に榮轉して捻匪の平定に功をたて、同治五年陝西巡撫にうつり、七年病氣のため官を辭して泰州にかりすまいしていたが、十年ふたたび出でて東河總督（河南山東兩省内の黄河の治水をつかさどる長官）を授けられ、在職中光緒元年二月に卒した。男子がなく、弟廷樞の子聯寶を過繼子とした。

* 喬廷樞は、光緒江西通志職官の條によると、監生の出身で、同治十一年署鹽法道（鹽法道は一省内の鹽の販賣を監督する）、光緒元年鹽法道、同五年署鹽法道となつてゐる。光緒補修徐溝縣志選舉の條によると、江西鹽法道であつて布政使の待遇（銜）をもらつたとなつてゐる。

* 喬聯寶は、その家人斯祥の上申書によると安徽特用道とあるが、徐溝縣志選舉の條には記載がない。

* * * 中國では女の子は家を繼承することができない。故に男の子がないときには、同族中のもつとも血縁の近い、しかも、世代の序列（輩）が自分より一つ下の、すなわち自分の子供と同じ世代の序列の者を養子とし、これに他姓の女を妻に迎えさせて家を嗣がせる。かかる養子を過繼子と稱する。

喬松年は、兩淮鹽運使であつたからでもあろうが、兩淮鹽の利益に目をつけて、楊澍なるものに、製鹽場を買占商人（場商）をやらせていたものらしい。それが、光緒三十二年に至つて、喬松年の過繼子聯寶と楊澍の子楊諮との財産あらそいから訴訟となり、喬松年が商業高利貸を經營していたことがばれるのである。

喬松年のかたるところによると、楊澍は、彼が常鎮通海道であつたとき、太平天國の亂でにげだした書吏をおぎなうために募集をした際、これに應募してきたもので、はじめは、揚州の生れで常杏洲という者であると稱していた。ところが、使つてみると、字も書け、いくらか古典もわかる男であるので、喬松年は、楊澍がどこかで讀書生活をしたことのある者にちがいないにとらみ、その家系やりれきをききただした。す

ると、楊澍のいうには、康熙時代の江南提督であつた楊捷の子孫で、世世官途につき、今なお輕車都尉の爵位（男爵の下）がある。しかし、太平天國が揚州をおとしれたとき、家人の半ばは戰亂によつて死に、かれは身をもつて江南に逃れてきたものの生活にこまり、募集に應じて書吏となつたのである。しかし、レッキとした家柄の出身でありながら書吏の仲間になるのを、と告白した。喬松年は、これをすぐには信用しなかつた。そのうち、喬松年は親が死んだので歸郷し、楊澍も職を辭して去つた。ところが、喬松年が兩淮鹽運使になつて泰州に赴任すると、楊澍がまた面會にきて、いまは故郷で自警團（團練）の世話をしていることや、田地を賣つた金を納めて官職をえた（捐納）ことなどを話し、また、その家藏にかかる康熙年間の皇帝の親筆、叙任叙勳の記録、任官の年譜をみせた。これと揚州士人の語るところによつて、楊澍のいうことがいつわりでないことを知つた。かくて、喬松年が安徽巡撫になると、楊澍をよびよせ、正陽關にある釐

金を徴収する税關を管理させたところ、すこぶる成績があがつたという。

* 喬勣恪公奏議（全集所收）卷七、同治四年正月二十日附「據實陳奏摺」

* 兩淮鹽運使は揚州府城に駐在しているのであるが、咸豐三年二月太平軍によつて揚州が占領され、同八月に、皇帝が兩江總督に命じ、運使をして通（州）泰（州）の適當な地に移駐し、運判（數箇處の製鹽場を管理する役人）、場員（各製鹽場を管理する役人、すなわち鹽課司大使）を監督して各製鹽場でそれぞれ鹽税を徴収させている（清鹽法志卷一四六、職官）から、鹽運使は泰州に移駐したものと思われる。

ところで、喬松年が、その門下を爵位のある家の出身であるといつてみだりに登用する、と非難の上奏をするものがあつたので、同治四年正月、皇帝の命により、楊澍が金を納めて得た同知（府の次官）の待遇および知縣をとり上げ、郷里に放逐することを命ぜられた。^{*}これにたいし、喬松年は、楊澍が彼の門丁に非ることを上述のごとく辯明して楊澍任用の緣由を上奏す^{**}るとともに、上諭にしたがつて楊澍を揚州に歸らせ、かねてから關係をもつていた鹽商賣をはじめさせた。

* 實錄穆宗朝一二六卷、同治四年正月壬寅の條

** 前掲「據實陳奏摺」

これより先、喬松年が兩淮鹽運使であつたとき、淮南^{*}伍祐場（場は製鹽場のこと）の買占商人（垣商）^{**}何至華は喬松年から銀二萬兩を借りたが、喬松年が安徽巡撫に赴任する際、その返済をもとめられたところ銀兩がなく、所有していた五百組の製鹽設備（^{**}竈^{**}）のうち、二百組をさいて喬松年に質とした。すなわち、喬松年は、伍祐場において、すでに質權者として二百組の製鹽設備（竈產）を所有していたので、楊澍をしてその經營に當らせたものと思われる。

* 伍祐場は、咸豐八年四月、鹽運使心得の聯英が、「通州および泰州所屬の二十箇處の製鹽場は、みな范堤に沿うていて、南は呂四から北は廟灣にいたるまで延長七百餘里、掘港、安豐、伍祐が最大である」（淮南鹽法紀略卷八、盤鐵實數裏）といつてのごとく、淮南における最大の製鹽場の一つである。

* 兩淮の製鹽場における場商すなわち買占商人が垣商と稱せられる。鹽を貯積する垣を所有するからである。垣は周圍に溝を掘つた廣大な平地で、製鹽業者である竈戸から收買した鹽はここに露積され、その上を廬のむしろ

で蔽い、竹杭をさしてむしろが風でとばされないようにしてある。垣商は、この鹽を、船で奉壩をへて儀徴（同治四年より同十三年に至るまでは瓜州）の貯鹽處（鹽棧）まで運び、そこで役人立合のもとに鹽の賣さばき商人（運商）に賣渡される。政府はその際、運商から鹽の消費税などを徴収する。この税は一般消費者に轉嫁されることはもちろんである。垣商は、また、いろいろな方法で鹽戸を隷屬させている。

* ** 淮南の製鹽は煎鹽であつて、揚子江北部の海岸地帯に土砂が堆積してできた土地の、地中にふくまれた鹽分を水で洗いだして濃厚な鹽水（滷）をつくり、これを煎て鹽にする。このためには、地中の鹽分を、草灰をまいてこれに吸いとらせるための亭場、その鹽分をふくんだ灰に水をそいで鹽分を浸出し、それを蓄えるための滷池、その濃い鹽水すなわち滷を煎る竈と鐵（底の平たい圓い鐵製の大きい鍋）、および、燃料としての草、その草を刈る草場（蕩地という）が必要である。このように、製鹽のためには、亭場、滷池、竈および鐵が必要である。竈と鐵は小屋の中に設備される。製鹽に必要なこの一連の生産手段の一组を竈一副というのである。何至華はこれを五百組所有していたことになる。垣商の、かかる生産手段の所有、垣商と直接生産者たる鹽戸との關係などについては、拙稿「清代兩淮製鹽における生産組織」（本誌十一ノ一）を参照されたい。

何至華は同治十年に至つて、二萬兩を準備して、喬松年に質いれしてあつた二百組の製鹽設備を受出そうとしたが、楊樹はこれを承認せず、四千元の追錢を出してこれを買収した。ただし、この四千元は、楊家の支出したものでどうか、たしかにはわからない。この後の事情については、喬家と楊家の主張するところに相違がある。

喬姓の家人斯祥の主張はつぎのごとくである。

喬松年は、同治十年、二萬兩の貸金の代償として何至華の竈産二百組をうけると、店名を大德昌、自分の名を富文堂として鹽の買占商人（場商）をはじめ、楊樹をして經營にあたらせた。ところが、楊樹はまだ鹽の商賣に習熟していなかつたので、德成典という質屋を經營していた李韻亭と合資經營をすることにした。この德成典に對しても、喬松年が一萬兩を出資していたらしいことは、後になつて明かになる。かくて、同治十一、二、三年には、毎年數千串文（平價では一串が一兩である）の利益があつた。光緒元年二月、喬松年が死ぬと、かれの過繼子聯寶の生父廷槐が、翌光緒二

年親しく揚州にきて財産調査をしたところ、伍祐場の竈産二百組、資本錢一萬串文のあることを知り、楊澍に託して前のごとく經營させ、その上、資本錢二萬串文を追加した。楊澍は、これにたいし、子の楊誥に命じて領收書をつくらせた。そのほか、光緒二年には、新しく竈七組を築造したり、店の家屋や貯鹽場を修理したりした費用を、李韻亭と折半し、二千三百二十四串十四文を支出した*。

* この陳述でわかるように、大官僚喬松年と質屋の主人李韻亭が資本主として合資（合夥）し、李韻亭と楊澍が經營にあたつたのである。

ところが、光緒四年に、共同經營者であつた質屋（典商）李韻亭が分離したい意向をもらしたので、楊澍の中に立てて單獨經營にあらためた。そのとき、李韻亭の經營する德成典に出資してあつた一萬兩は、しばらくそのままとし、毎年六分の利息をおさめることにした。かくて、楊澍よりは、貯鹽場、店の家屋、製鹽設備の貸付料*の收入として毎年五百餘串乃至九百餘串を喬聯寶におさめ、光緒十一年に至つてゐる。光緒

十二年は報告のみあつて金は受取つていない。李韻亭の質屋にあつた金は、その後、四千兩を返却してきたがなお六千兩のこつており、その利息も光緒十二年には受取つていない。光緒十四年二月、喬廷槐は江西で病死し喬聯寶は、光緒十五年楊澍の住所邵伯埭*にきて、鹽竈の實地検査をしようとした。そこで、楊澍は喬聯寶に對し、彼自身が獨力で經營したいから財産を分割してほしいといひ出し、新舊二百七組の證書は匿してださず、ただ、楊誥の名義で作つた追加の資本錢二萬串文の領收書を鹽竈の證書であるといつわり、喬松年が生前において、製鹽設備の一半をもつて勞にむくゆることを約束した、といつて、強いてこれを折半して勘定し、結局、楊澍から喬聯寶に五千八百串文を五ヶ年賦で支拂うことにして契約書をつくり、楊澍の單獨經營になつた。

* このころには、場商としての設備である、鹽の貯積場たる場垣、店の家屋、生産設備である竈（これは、あたかも、地主がその所有の土地を小作人に貸して耕作させるように、場商から、自らは生産設備をもたない製鹽業者に貸し與えて製鹽させ、その賃貸料を生産した鹽でおさ

めさせる)を他の商人に貸與して(借りる商人は租商という)貨料をとつていたのであるうか。原文に桶租という字がつかつてある。桶租の意味ははつきりしないが、桶は場商が製鹽業者から鹽を收買するとき、鹽を秤量する二百斤入りの容器であるところから推して、場商所有の竈を他の商人に貸して經營させておさめる賃貨料ではあるまいかと思う。

* 揚州の東北方、邵伯湖の東南岸、埭は堰であつて、東晋の謝安が灌漑のためにここに堰をつくつたのであるという(嘉慶重修揚州府志卷九、河渠一)

その後、光緒三十二年の春、喬聯寶の母が死んだ際、その持箱の中から、延機ののこした出納簿とか、楊澍が資本を受とつたり利息をおさめたりした時の親筆の手紙や勘定書が発見され、喬聯寶ははじめて楊澍に欺かれたのを知り、その證據品をもつて揚州へ來、ついで邵伯埭へ行つて楊誥に面會しようとしたところ、揚州の鼎泰棧に在るとのこととそこをたずねると、邵伯埭へ歸つたという。兩處を二度も往返したが、いつもにげかくれて面會しない。そこで、家丁に書信をもたせて邵伯埭につかわし、決算を約束させたが、はじめは家にいるといいながら、書信を見た後、また、外出

しているという。しかし、兩日ののち、楊誥は揚州に來て聯寶にあい、近日中に中人をたてて決算することを承諾しながら、依然にげかくれている。楊誥父子はかく恩義にそむくことはなほだしい。喬松年が、いつか、楊澍の勤勞に對する報酬として一半をあたえることを約束したのが事實としても、與えたと與えないとは喬家の勝手である。かかる恩義にそむく楊家に一半を與えるよりは、本籍地や揚州で目下さかんに學校を建てるために資金をもとめているから、この一半を學校に寄付し、人材養成の資とした方が有効である、といつて兩淮鹽運使に訴訟を提起し、つづいて、大德昌の店名、富文堂の實名、新舊二百七組の製鹽設備、および、貯鹽場、店の家屋を調査し、それを差押えるよう伍祐場の長官(製鹽場を管理する鹽課司大使)に訓令してほしい、と願ひ出た。

運使はこれにたいし、淮南總局に命じて、楊誥を拘引して帳簿の検査をさせ、つづいて、伍祐場に訓令して、鹽竈、貯鹽場、店房を差押えさせた。

* 淮南總局は、道光三十年、淮北にならつて、淮南におい

でも從來のような一定の鹽販賣人（運商）が一定地域に獨占的に鹽を販賣するという制度にもとづく「引鹽」を廢して、鹽にかけられる税金を納めたものは誰でも鹽の販賣ができ、かつ、どこへ持つて行つて賣つても自由である「票鹽」に改めたが、この時、兩淮鹽に關する事務を總理する兩淮（都轉）鹽運司の書吏のわいろ、浪費の弊を改めるため、揚州府城におかれた役所。通、泰兩州所屬の二十製鹽場の產鹽を、品質によつて分類して値を定め、それを書いた牌を儀徴にある貯鹽所の門に掲げる（これが所謂牌價である）と、運商は自分の買いたいと思ふ品質を製鹽場の買占商人（場商）に指定し、それに從つて鹽價の總額を計算して淮南總局に提出する。總局では、この中から正課（本稅）、雜款（いろいろの附加稅）、釐金、棧用（保管料である。棧は鹽の貯積處である）をさし引き、その殘額を場商に與へ、運商には運搬許可書を與へる（光緒江都縣志卷一五、鹽法の條）

これに對し、楊誥の家人高升の主張するところは、つぎのようである。

何至華の製鹽設備（竈產）を引ついだときには、たしかに楊誥との合資によるものであつた。當時の請願書には楊誥の名を用いてはいるが、事實は、いつさい楊誥の經理にかかるもので、楊誥は遊學して外におり、

後には江浦縣に勤務し、喬松年と楊誥とが合資で經營したのか、商人を招いて經營させたのか、よくわからない。光緒十五年になつて、楊誥が金を納めて（捐納）通判（道の次官）にのぼり、揚州にかえると、喬松年の嗣子聯寶がきて、鹽商賣が不景氣で、遂には製鹽設備（竈產）がこわされる（犁毀）おそれがあるために、中人を通じて、一半の竈產を時價にてらして計算し、楊誥の單獨經營にうつしたいと申しでた。楊誥は喬家の申しいでを拒絶しがたく、やむをえず證書を作製した次第で、朱萬二氏が中にはいつていたのであつて、對面授受したのではない。その上、證書には共同の財産を明記し、また、銀錢の勘定は全部精算してすこのあいまいさもない、と明記してある。

ところが、本月になつて、喬聯寶が突然揚州にきて、楊誥と決算したいという。楊誥は、勘定はすでに全部すんでゐるのに、どうしたことかさつぱり合點がいかなかったが、父の代からの喬家との交際を思えば、聯寶とは未だ一面識もなかつたとはいへ、どうして往かないでおれよう。そこで、楊誥は服裝を整えて聯寶を

佛照樓に訪問したが、そのときは僅か數語を交えたにすぎなかつた。ところが、聯寶は、その翌日、楊誥にげかくれて會わない、と訴えたのである。喬家は、數萬の銀錢を吞併されたと稱しているが、かかる大金が積まれていて、どうして證書に記載しておかないことがあろう。たとえ喬家の富が石崇のごとくであつても、まさか、かかる大金をすて、十七八年の後になつて始めて調査をするなどということはなからう。まして、差引勘定をした當時には、喬聯寶は金を納めて官吏になつていて、女や子供とおなじではないのだから、どうして他人のかたり取るのを甘受しよう。私用の出納簿や手紙が證據になるというが、私帳は收支に手加減を加えてつくる可能性があり、手紙は御機嫌をうかがつたり、ものごとを伝えたりするものにすぎない。要するに、かかる出納簿や手紙は虚偽であつて、前にあげた契約書こそ鐵券にもひとしいものである。喬氏もそれとおなじものを一通所持しているから、二人を出廷させてその契約書をしらべれば、すぐ正しい判決ができる。楊誥とその子麟香とはともに舉人（省の試

驗に合格した者）であつて、楊誥は曾つて職掌のある官職（實缺）を得、麟香は現に内閣中書（滿洲語の文書を中國文に、中國の文書を滿洲文にほんやくしたり、詔勅の下書などをする書記官）で、すでに吏部より榮轉を上奏しているほか、族人中に仕官しているものも少くない。楊誥は商人ではあるが、かつて實缺についたこともあつて、斷じて家人と對質することをいさぎよしとしない。前述の契約書も兩方の主人が出廷してつき合せて見なければ明確にしがたい。故に喬聯寶にも契約書をもつて出廷させ、主人楊誥と法廷で對驗してほしい、と訴えた。楊誥も、また、淮南總局に出頭して、何至華が喬松年からの借金二萬兩の代償として喬氏に入質していた製鹽設備二百組を買収するときは、父楊澍より一萬兩を出して合資經營にしたのであることを言明した。

* 垣商としての設備、すなわち、製鹽業者に貸與して製鹽させる竈およびその附屬設備、製鹽業者から收買した鹽を貯積するところ（垣）、店の建物など（これを垣産という）を所有しているものが必ずしも直接經營するとは限らず、この垣産を他の商人に貸して經營させることも

ある。この他人の垣産を借りて經營する商人が租商である。

* * 地中の鹽分が少くなつて、製鹽に堪えなくなつた亭場、満地、鹽竈は廢棄するが、私鹽製造に利用されることを防止するために、これを犁毀するのである。

* * * 缺は官職のポスト、職掌のある官職のポストを實缺という。

ついで、楊誥の家人高升は、差押えられた買占商人としての設備（垣産）の返還をもとめ、つぎのごとく述べている。

喬松年が何至華より二百組の竈産を受けた當時は、鹽商賣が不景氣で、垣産のあるものはそのために困窮するものが多かつた。それで、喬松年はそれを心配して、楊澗への手紙にそのことを書いたので、楊澗は師弟の誼によつて、一半の銀兩を出して合資經營にし、その利益は、喬松年を富文堂、楊澗を世澤堂として帳付してきた。富文堂の出産本（竈産として出資した資本）一萬兩、行本（經營費の出資）一萬串文の毎年の利益は、一萬餘串を下らなかつた。當初二百組の製鹽設備は、風潮や犁毀のため有名無實のものが多く、光

緒十五年、楊澗の單獨經營に改めた時の精算では、喬家、楊家の取得分はわずかにそれぞれ五十八組で、楊家が五千八百串文を出して喬家の取得分を買収したのは、喬聯寶が現實の狀況をみて、損害の及ぶことを恐れて申出たものである。當時、悉皆精算して現銀を送付したほか、年賦償還をしたのである。光緒十五年以後、現在に至るまでしばしば修理して、現に百六十餘組の製鹽設備を存しているが、なお原數には及ばない。楊家のこれに投じた資本は、最初に出した一萬兩、單獨經營に改めた際の五千八百串、修理費四千餘串、何至華の喬家に入質していた二百組の製鹽設備を買収するために出した四千元のほか、鹽を買占める資本（鹽本）、燃料の草を買うための資金（草本）、製鹽業者への貸付（竈欠^{*}）を合計すると數萬を下らず、楊澗より楊誥、楊麟香と三世經營し、全家の生命はこれにかかつているのであるから、それを返還してもらわねば生計の維持ができない、というのである。

* 鹽本は鹽を收買するに要する費用、草本は煎鹽の燃料としての草を購入する費用である。垣商がそのもとに隸屬

させていた製鹽業者は、垣商の竈を借るほか、煎鹽の燃料である草も垣商から提供されたのである。特に伍祐場は製鹽が盛で蕩草の充分でない製鹽場である。竈欠は、竈戸が結婚葬儀などの不時の用を辨じ、または、生活費の不足を補うために垣商から借用した高利の錢である。

垣商は竈戸の生産する鹽をもつて高利をおさめ、また安い値段で鹽を買いあげていた。その上、この竈欠のために、竈戸は永久に垣商の搾取より脱することができなかつた。

要するに、喬氏は、伍祐場の買占商人としての設備（垣産）は喬氏の所有するものであつて、楊氏はその經營擔當者にすぎなかつたのであるが、遂に楊氏のためにだましとられたというのである。しかし、それを證明するたしかな證據があるわけではなく、ただ、同治初年何至華が喬松年から借りた二萬兩の代償として、二百組の製鹽設備を喬松年に入質したことが、たしかであるにすぎない。それが、同治十年に買収されて楊氏が經營することになつた経緯については、確實なことは不明である。しかし、楊氏の方では、何至華の製鹽設備を買収經營することになつた際には、楊氏から一萬兩を出して合資經營にしたのであると主張す

るのである。そうして、楊氏はこれにたいし、喬松年が楊樹にあてた手紙の中に、

鹽垣殊不易辦、以僕一半、頼

弟台長才措置、當可運轉自如、若在他入、恐久則

壅滯也。

（垣商の仕事はとりわけやりにくいものです。わたしの持分である一半は、あなたの達者な腕前で處置されれば、うまくゆくでしょうが、もし他の人でしたら、恐らく長い間には壅滯（鹽の賣れゆきが悪くなること）するでしょう。

とある「僕一半」なる文句が證據であるというのである。これに對し、取しらべに當つた江都縣知縣や淮南總局提調（總局の長官）は、この「僕一半」なる文字は、前後の文意や墨痕から見て挖補した形跡がある、という。鹽運使もこれに同意して、「僕一半頼」の四字を除けば、資本主が經理者をほめる口振であると斷定している。また、光緒十五年、楊氏の單獨經營に改めたときに作製した契約書を證據として、「従前出納した銀錢の勘定は、兩家の間で均等に精算し、少しのあいまいさもない」と書かれているというが、楊氏

は、まだ、資本若干、利益若干、損害若干について毎年の明細書を提出することができず、精算の實を證することができぬと斷ぜられている。かくて、半年近く審理した末、兩江總督兼鹽政端方は、該契約書は、いろいろ信賴できぬ點があるに對し、喬氏が何至華から單獨に譲受けたことについては信用してよいと判定し、楊氏の所有する買占商人としての設備を喬氏に返還させ、喬氏には先に楊氏より支拂つた五千八百串を返させ、恩義にそむいて詐取しようとした罪として、この五千八百串は楊氏に與えず、揚州學堂の經費にあてる旨の判決をした。

この判決が妥當であるか否かは、にわかには斷言できない。或は、楊氏側から訴えているように、名臣の後であつて、いろいろ官界に連絡があり、現に安徽特用道である喬聯寶が、先には江浦縣教職であり、現に候選通判である楊誥よりも歩のよい點のあることも事實であろう。しかし、ここでは裁判そのものが問題ではないから、ただ、官僚が匿名で鹽の買占商業を營し、質屋に投資していたという動かない事實を指摘す

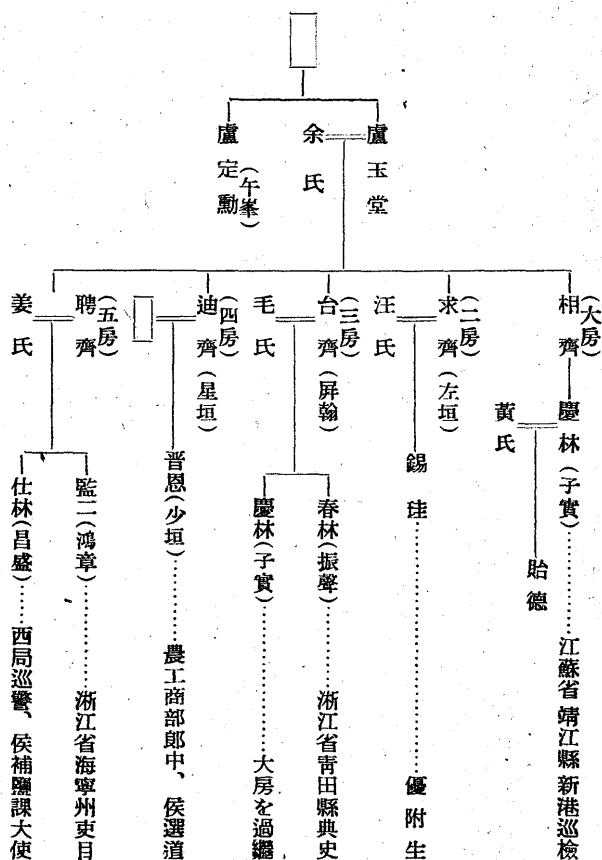
れば足るのである。

* 通判は道の次官または直隸廳の長官。候選通判とは、通判としての法定の資格のあるもので、都または本籍地で人事院（吏部）の銓考を待つてゐる者をいう。（「清國行政法」第一卷下二二五—二四二頁）

三

つぎは、盧氏の訴訟事件である。まづ、問題になる盧氏の家系を示すと次のごとくである*。

* この家系圖は、原告被告の上申書を總合して作製したものである。輩によつて名を揃えるべきであると思うが、その名が不明なものがある。原被兩告の官職については光緒三十二年の「大清摺紳全書」についてみると、盧晋恩の農工商部郎中、盧慶林の靖江縣新港巡檢、盧振聲の青田縣典史、盧鴻章の海寧州吏目は皆事實であることを知る。優附生は如何なるものか詳にしないが、郎中は中央各省（部）の課長、巡檢は州縣の要地に駐在して盜賊の追捕にあたり、典史は縣の監獄を管理し、吏目は州の治安の維持にあたる。いずれも知州知縣の屬官である。



この盧姓の一家に財産争いがおこり、大房の過繼子
 盧慶林、二房の盧錫珪、三房の盧春林、五房の盧監
 二、盧仕林およびその生母である汪、毛、姜の諸氏ら
 が合同して、四房の盧晋恩と争うことになったのであ
 る。

が、光緒三十一年、星垣が病没して子晋恩がついだと
 ころ、晋恩は師範學校をたてて、共同の財産である運
 鹽の大票九張小票八張^{***}を勝手に賣つてしまつた。彼等
 の母妻は本籍地においてこのことをきき、揚州に來て、
 晋恩に向つてこれをききただすとともに、大生紡績會

盧錫珪らの言分は次のごとく
 である。

彼等の祖父玉堂は、叔祖盧定
 勳^{*}が布政使として廣西、山東、
 直隸にあつた際、これに随侍し
 て會計係をつとめること十餘
 年、その間蓄積するところ莫大
 であつたが、その銀錢を四房の
 星垣に渡して淮南鹽場の垣產や
 鹽票を買つて經營させ、また、
 金をおさめて星垣を富安場大使^{**}
 にした。父の死後も分家せず、
 星垣は毎年節日ごとに洋銀數百
 元を兄弟に贈つていた。ところ

社（大生紗廠）^{***}にある十二萬兩で學校をたてる費用は十分たりるのに、どうして票を賣つたのか、と問うと、あれだけの票を持つていると、政府から百萬兩の寄附金の割當があるので、それをまぬがれるために賣つたのである、とのことであつた。それで、その賣上銀はどこにあるのか、ときくと、晋恩ははじて怒をふくんだ。そのうち、晋恩は、師範學校を本宅内にうつし、一族をもとの學校校舍にいれようと考え、家丁の袁福は彼等の母妻の持物を強制的に搬出し、不遜な言辭を弄して追出そうとするので、いささか主奴の禮を立てようとする、晋恩は袁福をそのかして汪氏をおし倒させた。その後も、家丁らに、汪氏姜氏を毆つたりけつたりさせて負傷させ、それを遮ろうとした貽徳も毆られて血をはいた。現に晋恩は、各製鹽場にある買占商人としての設備も賣ろうとしている。彼等は晋恩と祖を同じくし、三代未だ分家せず、この共同の財産をたよりに生活してきたのであるから、今晋恩が學校の經費を名として共同財産を着服することは許せない。至急、東臺場の吉恒祥垣、（吉恒祥という店名

をもつ鹽の買占商店の意）餘東場の徳長厚垣および利記垣、新興場の吉豐恒垣、丁溪場の徳豐恒垣、東臺縣城の豫昌祥兩替店（錢莊）^{***}を差押えていたのだきたいというのである。鹽運使は縣府の報告にもとづき、淮南總局をへて各場大使に訓令して、この鹽の買占商人としての設備、兩替屋を差押え、設備は判決のあるまで當局で經營することにした。

* 同治廣信府志卷七ノ一、選舉の條によると、道光辛丑（二十一年）の進士であつて、戸部主事より郎中にのぼり、山東、直隸、浙江の各布政使を歴任したとある。宣統山東通志職官の條によると、同治四年山東鹽運使となり續いて署按察使、五年署布政使となり、ついで七年直隸布政使となつてゐる。彼が山東鹽運使をつとめたことのあることは、彼の庇護を受けたと思われる盧紹緒が淮南富安場の鹽課大使となり、場商、運商を經營するに至つたいきさつと關係のあることと思われる。

* 光緒兩淮鹽法志卷一三四、職官の條によると、同治十二年、江西上饒縣人監生盧紹緒なるものが富安場鹽課司大使になつてゐるが、これが、ここにいる盧星垣であると思われる。光緒元年何垠の大使となり、同三年再び富安の大使となり、以後ながくこの任にあつたらしい。

* 道光三十年淮南の改票後まもなく、太平天國の亂に

よつて鹽政が荒廢したが、同治三年兩江總督曾國藩が兩淮の鹽政を再建し、湖北（鄂岸）、湖南（湘岸）、江西（西岸）に運鹽する鹽票は五百引をもつて一票としてこれを大票と稱し、安徽（皖岸）に運鹽する票は一百二十引をもつて一票としてこれを小票と稱した。その後、同治五年署兩江總督李鴻章が綱法を參酌し、當時票を有するもののみをもつて循環して運鹽することを許し、新商の運鹽を許可しないことに定め、票商の鹽票は子孫に傳え得る家産たらしめた。ここで、票法は一變して、殆んど道光三十年以前の綱法とかわりなく、一定の商人が一定地域の販賣權を獨占することとなつた。これから後、運鹽しようとするものは、票を買うか、或は票商から運鹽權を賃借りするかしなければならなくなつた。しかし一方に票商には多額の制當寄附金（報効銀）が課せられ、それがまた票の轉賣値段である票價、運鹽權の賃賃料たる票租を高めることになり、光緒末年には、大票一張の値は舊票で平均二千五百兩、新票で一萬兩と稱せられている（張季子九錄、政聞錄卷十七、「衛國郵民化鼻餌盜均宜變鹽法議」。時代が降るが、民國十六年頃の各岸の票價、票租を參考のために掲げると次のごとくである。

皖岸	西岸	鄂岸	湘岸	票價	票租
二千兩	七、八千兩	一萬兩	一萬兩	二千兩	二千兩
六百兩	二千兩	二千兩	二千兩	票小	票大

（林振翰、淮鹽紀要、第三篇、第五章、一五八頁）

*** この紡績工場にある十二萬兩は出資か、貸出か、この陳述のみではよく分らない。しかし、商業資本が産業資本に轉化しつつある情勢の一端がうかがえる。

**** この列舉によつて、盧姓の手に製鹽設備が集中せられていたこと、隨つてその利益も莫大であつたこと、その一部が近代紡績工場に投資され、また中國的な金融機關である錢莊にも投資されていたことがわかるのである。

これに對し、農工商部郎中（郎中は部務を分擔する司の長である）候選道盧晉恩は、鹽運使に上書して次のごとく述べている。

私の家はもと寒素で、太平天國や捻匪の亂のため、祖先の祭祀をするための田地がすこしあるほか、全然蓄財とはなかつた。私の父の兄弟は四人で皆家において生活していた。四男である私の父は、はじめ、祖父の弟である布政使盧定勳に従侍して任所におもむき、のち鹽課司大使を補授されてからは、獨力で本籍地において五百擔の小作米の入る田地^{*}を買つたが、これと住宅一箇所のほかには共同財産はなかつた。これは祖母の分家證文（分書）があつて證據とすることができ

る。當時いとこ（堂兄弟）たちは幼少で、みな私の父に従つて富安場の任所に行き、父はこれを養うとともに教師をつけて讀書させた。また、伯叔父の没後、父は毎年各房に小使（津貼）を與え、今に至るまで繼續していることは、昨年の領收書があるから證據とすることが出来る。盧子實、盧春林、盧監二のごときは、父がそのために金を納めて官職につけ、かくて彼等は皆それぞれ身をたてることができたのである。故に、情の上からいえば、かれらはかかる反逆に名をつらぬべき義理あいではないし、また、かれらがそれぞれ官途にあることからいえば、みだりに職守を離るべきではない。それに、たびたびの上書に本職本名を用いていないのは何故か。そこにあきらかに不實が存している。その中で、盧仕林すなわち盧監二の弟の昌盛は人物もつともわるがしこくて、さきに蘇州の警察學校に入學中は、私が學費旅費を支給していたのであるが、卒業して歸つて西巡局警差となるや、勢にまかせて横恣のふるまい多く、家庭の平和を亂した上、また學堂の下僕をむちうち、教員と衝突し、誰からも皆白眼視

されているのであるが、かえつて私が家丁をそそのかして尊長を毆踢したというのである。當時、私は上海に行つていて、家丁をそそのかすなど全然知らないことである。また、盧錫珪は、毎日揚州の無賴であり、三百代言である方少堂と謀つて私を無實の罪におとしいれようとしている。それから、各場の鹽の買占商人としての設備については、全然私と關係がない。ただ、父が富安場大使の任にあつたとき、商人が鹽の買収をしなかつたので、父は役所の資金を借り商人に代つて割當額の鹽を買収したことがあり、鹽務を熟知しているとの評判を得たので、父の名をかるのもあつて、それが父の所有と誤解されたものだろう。また、大小の鹽票もこれと同じく事實無限である、と主張する。

* 租が全收穫の二分の一とすると、五百擔の租穀のはいる土地の全收穫高は千擔である。また、一畝の收穫高を三・五擔とすると、この土地の面積は二八六畝ぐらいとなる。おそらく、五百擔の租穀のはいる土地の面積は三百畝前後ぐらいではなからうか。

ところが、盧晋恩は、兩江總督兼鹽政に上書して、各場の垣産は他の商人と合資經營しているものであることを述べている。一方、各場大使に命じて調査させた結果は、吉恒祥垣は安徽歙縣人慶德成の經營、利記は株式會社組織で經濟され（集股公收）、吉豊恒垣は大興縣人樂智祥の經營、德豊恒垣と德長厚垣とはともに無錫縣人楊輝堂の經營であつて、盧姓とは全然關係がないとのことであつた。

これらの買占商人としての設備が、事實上盧姓と如何なる關係にあつたものかはつきりしないが、たとえ盧錫珪らのいうように、晋恩が各場場員に運動して、うまくごまかしてもらつたといふことの有無はともかく、盧晋恩が差押えられた設備の返還を強硬に要求しているところをみると、かれと關係がなかつたとは思われない。かれは郎中であり、かれの父も久しく鹽課司大使をつとめ、後には湖北道員にもなつたのであるから、たとえ買占商人としての設備を所有していても名を出すようなことはあるまいから、その表向きの經營者を調査しても、彼との關係は明かにならないのが

當然だろう。おそらく、彼の父星垣が大使をつとめていた間に、その地位を利用して買占商人としての設備を手に入れ、匿名で經營していたものとみて誤あるまい。大生紡績會社や豫昌祥兩替屋（錢莊）については、盧錫珪の最初の訴狀中に言及されている以外ほとんどふれていないので、それと盧氏との關係はよく分らないが、大生紡績會社に對しては十二萬兩を出資したか貸したかしたものと思われ、兩替屋はおそらく盧氏の經營になるものだろう。

盧晋恩の所有する資産が、盧錫珪らのいうごとく、祖父玉堂が弟の布政使盧定勳に隨侍していて蓄積したのか、それとも、盧晋恩の主張するごとく、その父星垣が盧定勳に隨侍していて蓄積したものか不明であるが、いずれにしても、一省の民政（その最も重要なものは租税の徴收である）の元締である布政使についていて、いろいろや中飽によつて得たものであることはたしかである。また、それが如何に利用され、それによつて、一族のものが如何なる恩恵を蒙むるかを具體的にしめすものである。

この盧氏の訴訟事件は、被告の盧晋恩が郎中候選道の官にあつて、知縣や知府の直接訊問に應ぜず、むしろ兩江總督を動かしていた感があるに對し、盧錫珪らは、西巡局警差であり、候補^{*}鹽大使であつた盧昌盛を通じて知縣や鹽運使に働きかけていた感があるが、結局において盧晋恩の強硬拒否のため、原被兩告を出延させて對質することができなかつた。それで、原告被告いづれの言分が正しいのか不明のまま、兩江總督の斷決に従つて、盧晋恩から大二三五の各房に六千元宛を與えさせてケリをつけることになつたのである。

^{*} 法定の資格のあるものが、すでに人事院(吏部)の銓考を経て、命ぜられた省に出向き、欠員の生じるのを待つてゐるものが候補である。

四

上に提出した二例は、官僚が商業高利貸的に、いかに鹽商、質屋、錢莊とからみあつてゐるかを具體的にしめすものである。また、この具體的な實例によつて、官僚が賄賂、中飽によつて得たものを土地或は商

業高利貸的企業に投じ、その利潤によつて勉學し捐納して官僚が再生産されてゆく過程を知ることができるのである。

この二例は、いずれも、アヘン戦争以後に屬するものであつて、新しい中國のありかたの一端をみせてはいるが、ここに示されているような官僚の商業高利貸の性格は、基本的には、アヘン戦争を契機とする新しい社會經濟情勢によつて形成された傾向というよりも、貨幣經濟の發展以後における官僚の重要な一つの型を示すものと考えてよいのではなからうか。もし、この推量が許されれば、ここにかかげた二例は、中國官僚の商業高利貸の性格を具體的にうかがうエクザンブルとして役立つのではないかと思われるのである。

(一九四八、三稿、一九五一、七補)

なお、「夢蕉亭雜記」は丹羽正義先生から借覽したものである。

Dynasties the rulers adhered to the principle that restriction should be imposed upon the number of the temples and priests of Buddhism which is of foreign origin. Emperor Shih-tsung (世宗) of the Hou-Chou (後周) dynasty, the last of the succeeding five dynasties, promulgated a thirteen-point edict in 955 A. D. on his policy toward Buddhism. Historians of Buddhism regard Shih-tsung's policy as one of the four great persecutions in the history of Buddhism in China. The author has made, however, minute studies of the event in the light of *Wu-tai-hui-yao* (五代會要), the Old and New Annals of the Five Dynasties and other historical records as well as inscriptions, describes Shih-tsung's policy of making Confucianism the basic principle of government in accordance with tradition, and concludes that Shih-tsung's policy toward Buddhism was not so tyrannic as often told by Buddhist writers, but it must be regarded as revealing Shih-tsung's statesmanship as well as his intention to restore Buddhism in its true spirit and form. The author further refers to contemporary folkways and popular Taoist-Buddhist beliefs.

THE CHINESE BUREAUCRAT AS MERCHANT-USURER

Yoshihiro Hatano

It is often said that in China the bureaucrats, landlords and merchant-usurers constituted one inseparable whole. Though bureaucrats practised usury from old, it was after the Ming period (the 14th-17th centuries), when money economy began to prevail, that this phenomenon became remarkable. The nature of Chinese bureaucrats as merchant-usurers has not been hitherto exposed concretely due to the peculiar system of enterprise in China. The author brings to light the two concrete instances of bureaucrats who were merchant-usurers in the latter part of the 19th century, depending upon materials

AGAIN ON THE SALARY OF THE GOVERNMENT OFFICIALS UNDER THE HAN (漢) DYNASTY

Kiyoyosi Utsunomiya

To *Tōyōshi Kenkyū*, Vol. 4, 1940, the present author contributed an article entitled "On the Salary of the Government Officials under the Han Dynasty." In that article he said that the Han Government officials were paid 70 per cent in coin and the rest in kind in spite of the edict of 50 A. D. which provides payment in coin and kind half and half, and that throughout the Han period the 70-30 per cent payment was a rule. Recently in his articles on the Han measures appeared in HJAS, 1950, and *Kuo-hsüeh-chi-k'an*, Mr. Yang Lien-shêng attacked the present author's view. And Mr. Lao Kan also contributed an article on the same subject to *Ta-lu-tsa-chih*, I-II, 1950. The present author tries to criticize the views of these two Chinese authors, and develops his own view in the light of some passages in the Biography of Ts'ao-man (曹瞞), which are quoted in *Chiu-chang-suan-shu* (九章算術) and in a note in Vol. I of the Wei Annals (魏志). The author holds that his view still holds good.